



ベテランスタッフによる45周年対談

ここからは、大栄建設を創業時から支えてきたメンバーに創業時のことから語ってもらいました。今では想像できないような苦労話も飛び出し、笑いを交えながらの座談会となりましたが、業界全体の変遷が分かるのはもちろん、大栄建設の今と未来へつながる基礎がここにあったのだと分かる内容となりました。

(座談会は敬称略)

【座談会参加メンバー】※会長、社長も時折参加します



熱海 隆夫 専務執行役員 (昭和 54 年入社)



金子 元樹さん (昭和 53 年創業メンバー)



荒木 栄司 労務安全部長 (昭和 55 年入社)

創業時や40年以上前のことは鮮明に記憶している

—金子さんは創業メンバーだったんですよね？

金子 そう。僕は南野建設で会長の後輩だったんです。僕に仕事を教えてくれたのは会長なんです。それで独立する際、一緒についていきました。

熱海 創業から半年くらいで僕は入社して、そのあとに栄ちゃん(荒木)が入社。僕らの指導係は金子さんでした。今でこそ、こんなに優しいけど、昔は怖かったですよ(笑)。

金子 昔はね、現場で作業する人の中には荒くれ者ややくざ者みたいな人もいて、それに負けるわけにはいかないから、虚勢張ってたんですよ。いつも真剣勝負だったから。

熱海 僕は最初、怒られてばかり。

金子 専務が入社して一番初めに「現場の写真撮ってこい」って言ったら、「撮ってきました!」ってカメラのふた開けて、フィルムをダメにしちゃって、「こんにゃろっ」て怒ったなあ(笑)。

荒木 最初の現場って、みんな覚えてるよね。自分は石山だったな。

熱海 みんなね、40年以上前の話は鮮明

に覚えているよね。札幌市内の現場をたくさんやってたから、会長と車で走っていると、ここは何年にやった現場で、元請けがここで、代理人が誰で、土が硬かったとか水が出たとか、思い出話が次々出てくるんですよ。

会長 たまに嘘つくけどな(笑)

創業からしばらくは、ほとんどの作業が人力だった

一創業時の仕事や作業の仕方は今とは全く異なると思うのですが、どんな風に仕事をされていたのですか？

荒木 何でも人力だったよね。測量も今は機械の自動測量だけど、昔は糸の先におもりをぶら下げて垂直かどうかを確認する「下げ振り」や水平器を使って上下のレベルを測ったりね。

金子 どこに何が埋まっているか分からないところもあるから、調べるためにダウンジングみたいなものもやってたよね、「ここ掘れワンワン」みたいに(笑)。

一穴を掘るのも人力だったんですよね？

熱海 僕たちは完成している土管を、穴を掘ってそこに設置するんだけど、掘る長さは100mや200m程度。それを人力で掘っていました。そして大変だったのが、機材を積むとき。当時、発寒に飯場があって、そこから機材を運ぶときにトラックに積むの

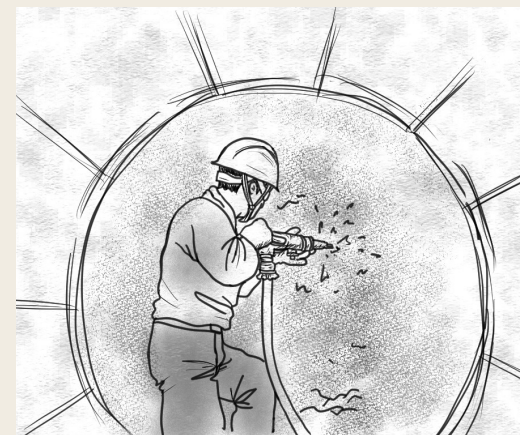


が大変だった。足場に板を渡して、機材にロープをくくりつけて、みんなで「えんやこら」人力でね。大きなかなてこを使ったりもしたね。ちょうどそのころ、直営部隊の作業員が30~50人いたから、人力でもなんとかできたんだけどね。

一スコップやピックで掘るんですよね？

熱海 そう。創業時、会社にあった道具は

4トンのトラック1台に油圧ジャッキ1台、それからスコップ。ピックなんかはリースしてましたね。当時は掘っていくのにも力と技術が必要で、先頭で掘っていく作業員は「先山」と呼ばれて、給料も良かったんだよね。機械が入ってくるまでは、この先山を担当する人が偉くてね。1回、先山の人とケンカして、「もう掘らない」と言われ、売り言葉に買い言葉で「ああ、いいよ」って。自分でも掘れると思って、やってみたらできなかった(笑)。「すみません」て謝ったけど、先山の手を見たらね、グローブみたいに大きい。これはかなわないなって思いましたよ。



社長 それこそ重いポンペを背負ったまま立坑へ降りていく人がいたって言ってましたよね？

熱海 いたね。スピード勝負なところもあって、昔はドラゴンボールに出てくるスーパーサイヤ人みたいな力自慢の人が結構いたんですよ。φ600の管を入れるのに掘り進めていく際、足にロープをつけて掘り進めて、最後に引っ張ってもらって出てくるとかね。出てきたら、お腹が擦り傷だらけで。今となっては笑い話だけど、よく考えたらどれもこれも命がけですよ。

7年ほどして、少しずつ作業に関する機械を導入

一機械が導入されはじめたのはいつくらいからですか？

熱海 創業から7、8年目くらいかな。掘削の機械を導入してもしばらくは人力で掘ってはいたけれど、完全に手で掘るのをやめたのは25年くらい前。今は99%機械で掘ってます。



金子 機械で掘れないサイズは人力でやっていたけど、どんどん機械や工法が増えて行って、ほぼ機械化だよな。

荒木 今はもう手で掘れる人はいないんじゃないかな。掘れてもせいぜい1~2mくらい。10mになんてなったらムリだろうね。

熱海 最初のうちは機械もレンタルか中古でした。そういえば、中古のユニックを購入したとき、すごく嬉しかったな。機材を人力で運ばなくていい!って。

金子 確かに。もう積まなくていい!って。

荒木 でも、当時は1台しかなくて、先輩

から順に使うから、自分のところには回ってこないなあって(笑)。そういえばユニックの使い方も、今じゃ考えられないこといっぱいあったね。ユニックが傾くまで積んで、「危ない!」ってこともあったけど、そういう経験をしているから、これ以上は危険とか、加減は分かるというのはあるかな。

一機械は少しずつ増やしていった感じですか?

熱海 そうですね。それこそユニック買って、ダンプ買って、専門的な掘る機械などを揃えていきましたね。そして、その機械を置く場所が必要になって、30年ほど前に石狩に機材センターの場所を購入しました。そのあと車両センターも作りました。機械も最初は中古で購入していましたが、今は新しいものを購入するようになりました。おかげさまで経営的にずっと右肩上がりできているので、毎年何かしら設備投資ができる環境になっています。業界の中でもうちは機械化が早いほうで、それは会長が古いやり方にこだわることなく、新しいことに挑戦しようという人だったから。いい

タイミングで機械化にシフトできたと思います。

常に先を行き、 どこよりも早く青いつなぎを 制服に採用

一古い話に戻りますが、創業時の現場での格好は?



金子 最初のころは、それぞれが好きな作業服を着て仕事をしていただけで、35年くらい前だったかな、みんなお揃いの制服にしようってなって。バイクメーカーの青いつなぎを見つけてきて、カッコいいし、動きやすいし、いいねって。今でこそ、そういう建設会社増えてきているけれど、うちははしりだったと思うよ。

熱海 今もうちは先端をいってるよね。社長が細身のパンツや汗を吸収するウェアとか、おしゃれで機能的なものをどんどん取り入れて、他社がみんなそれを真似をしてるくらいですから。

一ヘルメットなどはどうだったんですか?

荒木 自分が入社してすぐはヘルメットをかぶってない人もいたけど、ヘルメットをかぶって、きちんと顎ひもを留めることがルール化されはじめたころでした。今はもうしっかりと安全対策を取って装具もつけて仕事しているけれど、昔はハーネスもなかったね。

熱海 いっぱい装着していて動きにくいのかなと思うときもあるけれど、やっぱり安全第一だからね。着るものに関して

は、我々職員だけでなく、作業員と呼ばれていた人たちも建設現場で働いているからといって汚い服装で家に帰るのはよくないという会長の考えがあって、きちんとしようって整備しましたね。そういえば、その作業員という呼び方も、労務者、建設作業員と変わって、今は従業員と呼んでいます。社長が交代してからは、それまでまとめ役の人を「世話役」と呼んでいましたが、それも「エンジニア・マネージャー」と変わりました。この45年で、服装も呼び方も安全に対する考え方も随分と変わりましたね。

直営部隊と一緒に本州へ 出稼ぎに行っていた時期も あった

一服装や考え方も変わったということですが、働き方も変わっていますよね？

熱海 そうですね。今では考えられませんが、僕が入社したころは、定時に「帰っていますか？」と聞いたら、夜も仕事があるからと帰してもらえなかったり、「着替えを



したい、風呂に入りたい」と言ったら、それも「ダメだ」って言われたり(笑)。今はきちんと休みも取れるし、残業もほとんどないですけど、あの頃は昼も夜も土曜も日曜も現場がありましたからね。作業員の人たちは日当で働いていて、請負だから、稼ぎたい人は昼夜問わず土日も働き、僕らが月に14万、15万円の給料だった時代に、彼らは40万円とか稼いでましたよ。中には70万、80万円という人もいました。なんでも人力でやっていた時代だったので稼げたんですね。

一冬場は本州へ出稼ぎに行っていた時期

もあるんですよね？

熱海 そうそう。直営の作業員の人たちを連れて本州の現場に出稼ぎにいて、4、5カ月したら北海道に戻ってくるという生活を送ってました。出稼ぎに行くときは、みんなフェリーに乗って、それもエコノミーでいくから、船酔いしながら本州に行きましたね。

金子 ついたあとも大変だったよな。当時はカーナビもスマホもないから、住所と簡単な地図が描かれた紙きれ1枚を頼りに現場まで行ってたね。



熱海 その紙きれしかないから、車を運転しているときも必死。そのせいか、道はよく覚えたね。1回通った道は忘れなかった。今はナビに頼っていて覚えられないけど(笑)。

荒木 本州は土地がないから、現場にも休憩所なんかなくて、昼ごはんを食べるのも天気が良かったら公園のベンチに座ったり、歩道にブルーシートを敷いてその上に座って食べたり。天気が悪かったら車の中でとかね。

熱海 知らない土地で誰も知り合いがないからって、ブルーシートの上で昼寝もしたよな。

金子 飯場で昼食用の弁当を用意してくれたけど、ご飯が凍ってることもあって、お湯もないから公園の水飲み場の水をかけて、塩辛をのせて、冷たいお茶漬けみたいにして食べたこともあったね。

熱海 あの頃は漁師の作業員の人も多かったから、塩辛とか送ってもらってたね。でも、弁当のおかずがおいしくないとか少ないとか文句が出るから、みんなに文句を言われないように缶詰を買ってきておか

ずとして出して、あれこれ気を使ってましたよ。

金子 寝泊りするところもすごいところだったよな。

熱海 10~20畳くらいの大部屋に、大の男が12、3人で寝泊まり。ただ寝るだけなんだけど、畳1枚ちょっとの広さが自分のスペース。布団を敷く広さが足りなかったら、2段ベッドとかね。それで、やることもないから、酒飲んで寝るんだけど、いびきがすごくて。

金子 寝れないんだよな、うるさくて。

熱海 そう、布団を頭からかぶってもうるさくてね。腹立つからティッシュを鼻に詰めたりしたけど、それでもいびきが止まらないとかね(笑)。どれも今となっては笑い話なんですけど、うちは、昔がこうだったから今もこうしろとか、そういうことを言う人がいない会社なんです。それは、会長がみんなのことをいつも考えている人で、みんなが働きやすいように改善できる点があればどんどん変えていこうという人だったから。機械化が早かったのもその一つです。それによって働き方が大きく変わって

いったわけですから。

みんなでゴルフをするなど、思い出が詰まった慰安旅行

会長 慰安旅行の話とか、楽しい話をしよう。

金子 初めての慰安旅行がサンフランシスコに行ったりして豪華だったよね。そのあとはハワイ、グアム、バンコク、それからまたハワイっていう感じで、海外もたくさん連れていってもらったね。

熱海 42年間で20回以上海外に連れていってもらってるんじゃないかな。

金子 国内も沖縄とか楽しかったね。



熱海 旅行代金を全部会社が持ってくれて、しかも家族を連れて行ってもいいというときもあって、うちの子どもたちもいまだに「あのとき楽しかった」って言いますよ。ありがたいですね、本当に。旅行の思い出は山ほどあります。毎回、何かハプニングがあるので(笑)。

一旅行先では皆さん、どんなことをして過ごされていたんですか？

熱海 もちろん観光もするけど、ゴルフをすることが多いかな。うちはゴルフ同好会があって、みんなゴルフが好きなんです。今は社員の20人以上が同好会のメンバーになっています。

一同好会は普段も活動しているんですか？

熱海 もともと慰安旅行がきっかけでゴルフ同好会ができて、今は月1でゴルフに行っています。その際の費用は会社で一部助成しています。みんな練習熱心で、すごいんですよ。去年は、社長の発案で釣りの同好会もできたんです。船を持っているスタッフがいて、釣り好きも多いということ。こんな風に仕事だけでなく、プライベートの時間も一緒に充実させながら、コ



ミュニケーションを取れる環境というのがいいのかなと感じています。コロナがあって、しばらく慰安旅行も行けていなかったんですが、2023年は4年ぶりに鹿児島県の屋久島に行くことができ、やっぱりみんなで行くと楽しいなと思いました。若い社員も楽しかったみたいで、「社長、来年はどこに行きますか？海外ですか？」なんて言ったりしていますよ。みんなで一生懸命稼いだお金を、いかにみんなで楽しく使うのが大切。そうすることで、仕事にもまた張り合いができて、いい効果があるんじゃないでしょうかね。

語り尽くせぬほどある 会長とのエピソード

一会長との思い出エピソードなどを少し伺いたいのですが…。

熱海 いっぱいありすぎて、何時間でも話せちゃうね。でもね、とにかく社員のことを大事にしてくれる人。慰安旅行もそうだけど、普段の仕事でも「トラブルや問題があったらすぐに俺に言え」と言って、社員のためにすぐに解決に動く人でした。現場でトラブルが起きて、話し合いに行って、何時間経っても帰ってこなくて、やっと帰ってきたと思ったら、「あ、上着を忘れた」って取りに戻ったりする…、そんなお茶目なところもあって(笑)。でもね、それだけ先方との話し合いに集中しているってことなんですよね。

金子 確かにいつも話し合いの後は必ず忘れ物してたね。バッグやライターとか。

熱海 若い社員に「現場で我慢して、我慢して、我慢できなかつたら、俺に言え。ケンカはするなよ」と言うておいて、自分が代わりに出て行ってケンカしてくることもあった

ね(笑)。でも、ちゃんと最後は仲直りして帰ってくる。そこがすごいところだなと。

金子 会長なりの信念があって、妥協できない部分もあるから、ケンカになることもあったんだけど、それでも最後はきちんと収めてきてたからすごいよね。

熱海 あとは、「汗をかかない奴はダメだ。頭で考えないで、とにかく動け」ってよく言われましたね。要は、失敗してもいいからチャレンジしてみろ、やってみないと分からないだろうって。何か新しいことに挑戦してみたいと言っても、理由も聞かず頭ごなしにダメとは言わないし、むしろやってみろと言ってくれる懐の深さがありましたね。細かいことを話し出したらきり



がないくらい、会長とはたくさんのいい思い出がありますよ。もう、何時間でも話せちゃいますね。

社長を見ていれば、 安心して次の世代に 任せられる

一最後にこれからの大栄建設に期待することなど、メッセージをお願いします。

熱海 会長時代からずっと右肩上がりで売上が伸びていますが、社長に代わってからさらにグッと上がりました。息子だからといって誰も特別扱いしない中、むしろちょっと仕事がきつめだったかと思うところもありましたが、それでも文句ひとつ言わずに仕事に取り組んでいました。16年という長い期間、現場を経験していることが今につながっていると思います。

荒木 社長が入ったとき、指導係は僕だったんですけど、本当に几帳面で、きちっと仕事をやる人でした。僕は今も現場の手伝いに行くことがありますけど、昔と違って働いている人たちは本当にきちんとして

いるなと思います。挨拶もできるし、安全に対する考え方も違っているし、これからもこうやって進化していくのだろうなと思って見えています。

金子 僕も以前は現場を見に行くこともあったけれど、最近はまだ安心してみんなに任せています。社長が頑張ってるから、次の世代に任せていますよ。

熱海 社長には、会長のように社員を大事にし、次の世代を育てていきながら、どんどん新しいことに挑戦してもらって、10年、20年と会社を継続させてもらいたいですね。

一ありがとうございました。

取材後記／取材終了後、体が不自由な会長が靴を履く際も、上着を着る際もかいがいしくサポートしていた金子さんは、「会長にはずっと世話になってきたからね、これくらい当たり前なんですよ」とニコリ。長年、苦楽を共にしてきた絆を垣間見たような気がしました。